

文学的美意識と「日本」

川端康成と三島由紀夫(二)

瀧田夏樹 *takita natsumiki*

(十) 雪国

最近公表された「川端康成と三島由紀夫往復書簡集」(新潮一九九七年十月号)は、二人の「師弟関係」の本質を明らかにする上でまことに貴重な一級資料である。戦火の跡も生々しい東京から、鎌倉に初めて川端康成を訪ねた二十一歳の法科学生の姿は、すでに紹介した。その昭和二十一年に、小品「煙草」が川端の手で取り上げられなかったら、彼の文学上の出発は、もう少し違ったものだったであろうし、或いはまったくなかったかも知れなかった。

或いは、初期作品に対して、筑摩書房の中村光夫から「マイナス百五十点」という厳しい評価を受けたときの反応はどうだったろうか、断定のかぎりではない。気鋭の評論家のこの拒絶的評点は、後年、大作『金閣寺』の作者として、もう一人の批評家小林秀雄から受けた、「これは抒情詩で、小説ではない」とする判定と双璧をなしている。川端康成こそが、この若い新人を、文壇の入り口に立たせたのであって、他のいかなる文学者でもなかったのである。ところが三島由紀夫が、それまでに川端作品をそれ程知らなかったことなども、往復書簡集からはうかがわれ、この二人が世代を全く異にしていることに改めて気づかされるのである。

興味ある事に、戦争末期、処女作品集『花ざかりの森』を贈られた二十歳の学生作家に対し、川端康成がいていねいな礼文を書いた所から交流は始まり、昭和二十年三月八日のその礼状へ返した三島書簡で、平岡公威は「きのふ青山の古本屋で『雪国』をみつけもとめてまゐりました」（三月十六日付け）と報告している。三月十日は東京大空襲で、その余燼のなから拾い上げられたともいえるこの『雪国』は、勿論、「終章未完」のまま昭和十二年六月に一先ず刊行された旧作で、大団円を形成するため諸雑誌に書きつがれた「雪中火事」の章、「天の河」の章の分さえ含まぬ未完成作であった。「折節気にかかつてゐた」完成の機運をもたらしたのは、言うまでもなくその後の平和の回復ということであったが、内からの意欲を奮い立たせたのは、新しい世代から川端文学の読者として名乗りを上げた三島由紀夫であった可能性はきわめて高い。

彼が鎌倉の川端家を初めて訪問して間もない、昭和二十一年五月一日、雑誌「暁鐘」創刊号に、「雪国抄」と題する、旧「雪国」に接続させる部分を書きはじめられるが、これは、事実上、三島由紀夫の持つている『雪国』では読み得ない、「雪中火事」「天の河」の二つの章を、もう一度おおまかに紹介し直したものであることがわかるのである。そしてその二週前に書かれた三島書簡に、「……本日は御著『雪国』頂戴いたし洵に有難うございました」（昭和二十一年四月十五日付け）というくだりがあるところを見ると、川端康成の意気込みの火元が、一層鮮やかに浮かび上がる気がする。

この本は、「抒情歌」や「虹」など昭和一桁に発表された作品を併せ収めた戦後版『雪国』であり、特に集中の「抒情歌」からは、前に読んだことはありながら、並々ならぬ共感と感動を覚え、教えられるところが多かったことが縷々述べられている。「虹」は、読んだ経験がなかった。「雪国」に対しては、その及びもつかぬ高さが

強調されているが、「何度も拝読」している、と言いつつも、自分が入りこめぬ速さという告白ともとれる文言が認められている。いずれにせよ、それは、接続するべき章を控えた「雪国」だった。

しかし、最終章「統雪国」は、すぐには発表されなかった。さらに一年五か月を経過した昭和二十二年十月になって、ようやくこの終結部が「小説新潮」に発表され、ここに昭和十年の執筆開始から数えて十二年余りの大仕事のピリオドは打たれたのである。この越後湯沢を舞台とする雪国のメルヘンが、いかに締めくくりにくい作品だったかを物語る。

主人公の島村が、田舎芸者の駒子との関係が終わりに近いことを感じ、その潮時をはかりつつ別れかねて逗留を続けているうちに、また雪の季節がやってくる。縮み織りの産地でもあるこの土地の、若い女性の伝統的な家内工業である織りの現場を見ておきたいと、鉄道で一駅、二駅の近所の町々を訪ねてみたのも、駒子からの熱い思いにまったく応えられぬ自分に、行動のための何らかの「はずみ」をつけるためだったと書かれている。その夕方、温泉場に戻った島村が、駅から車で宿に帰る途中、小さい村のことで、駒子に見つけられ、一緒に坂道を歩いているところで、火災を報せる擦り半鐘の音が聞こえる。

気がつく、すでに猛烈な炎を上げている火元が村の繭倉だということが、駒子にはすぐわかったが、今夜はそこで映画会がもよおされていて、大勢の人がいる筈だということを思い出すまでに、瞬時の間があった。次いで二人はその方へ駆け出すのだが、それでもその興奮は、火事という異常によるものであって、振り仰ぐ漆黒の夜空に、大きく垂れかかった「天の河」の余りの明るさに、走りながら驚くゆとりがあった。作品『雪国』は、この終わり近くの状況を叙したまま、太平洋戦争の全期間と敗戦の時期を、いわば寝かされていたのだった。

しかし、繭倉の火の回りは早かった。昭和十六年八月の「文芸春秋」掲載の「天の河―雪国のつづき」によれば、「繭倉の三分の二ほどはもう屋根も壁も抜け落ちてゐたが、柱や梁などの骨組みはいぶりながら立ってゐた。屋内には煙も巻いてゐないし、どこが燃えてゐるのかわからぬのに、ところどころから思ひがけない炎が出た。三臺のポンプの水があわてて消しに向ふと、どつと火の子を噴き上げた。汚い煙が立つた」という、ほぼ完全に焼け落ちた状態にあつた。しかし怪我人もなく、人々の様子にも、鎮火を目前にした安堵の色がかもし出されていたのである。

島村も新しい火の手に眼を誘はれて、その上に横たはる天の河を見た。天の河は静かに冴え渡つてゐた。豊かなやさしさもこめて、天に広々と流れてゐた。

で終わる最後の場面でも、ポンプの水に刺激された「火の手」が、むしろこの火災の終末を物語るものとして、平静に見られていることに気がつく。つまり、どこから見ても、この火災の現場からは、それ以上何か予期せぬことの起こる可能性はとうてい考えられない状況しか読みとれない。

だがその万に一つの可能性を、川端康成は大作の終結に使うのである。作者は、これまでと同じように、前の部分に巧みに接続させて、火事の部分をほとんどそのまま使っている。さすがに、屋根や壁が「三分の二ほど」も抜け落ちてゐる絶望的な火事場は、「繭倉の半ばほどは屋根も壁も焼け落ち」と、時間的にやや押し戻してあり、さらに、「たつぷり水を浴びた屋根も燃えてゐさうには見えないのに、火移りは止まぬらしく」といった、今なお延焼を続けている火勢についての説明がつけ加えられた。

すなわち、その燃えた建物の見えぬ部分に、失神した葉子が倒れており、「入口の方の柱かなにかからまた火が起きて燃え出し」て、一筋のポンプの水がかかった拍子に「棟や梁がじゆうじゆう湯気を立てて傾きかか」り、低い二階から「人形じみた、不思議な落ち方」で墜落する姿を目撃される構想が、まったく新たに立てられたものであることがわかるのである。しかも、着ていた赤い矢絰の着物もそのままに、地上に当たった胼（こむら）が痙攣するのがわかる程の生色を帯びて、損なわれぬ体が潜んでいたことは、一種の奇蹟に近い出来事とされる。著者は、「非現実的な世界の幻影のやうだつた」と書く。

島村はやはりなぜか死は感じなかつたが、葉子の内生命が變形する、その移り目のやうなものを感じた。

それと同じ感じを、芸者の長い裾を引きずりながら火のなかに飛び込んで、葉子を胸に抱いて戻つて来た駒子も持つていたらしい。取り囲む群衆のなかから、「この子、気がちがふわ。気がちがふわ」という物狂わしい彼女の声が聞こえている。この数十行で、この火災は一挙に、島村と駒子の歴史にとつて決定的に重要なものとなり、優柔不断にここまで延ばして来た二人の時間を、外からぶつりと断ち切るものとなる。その決定的な断絶の思いが、「さあつと音を立てて天の河が島村のなかへ流れて来た」という最終行に凝縮するのである。

繭倉を焼き尽くす火災によって、初めて気がつく、夜空を巨大に深々とおおう天の河に、「流れ下る」動きや、島村を「掬い上げ」んばかりの力が与えられるのは、この「統雪国」の章においてである。別れの近いこの愛を静かに眺めおろしていた「豊かなやさしさ」あるいは、余りに裸で素肌を見せて降りてきている天の河の持つ「恐ろしい艶めかしさ」が、凝視の対象を越え、島村に生理的な動揺を引き起こすダイナミズムに変身するので

ある。遅れがちに駒子の後を追って走り、こんな場面でも人目をはばかり、人垣のうしろにたたずむしかない島村の目に、葉子を胸に抱え、必死に踏ん張った駒子の姿は、「自分の犠牲か刑罰かを抱いてゐるやうに見えた」のだ。その瞬間に、天の河は「島村」のなかに音立てて流れ落ちる。

その二、三節前の所で、島村は、この温泉場へ駒子に会いに来る夕闇の汽車のなかで、偶然、斜め向こうに坐った葉子の美しい顔がそのガラス窓に映り、ふと顔の真ん中に、窓外の野山で燃やす火が、ともるやうに重なった時の、胸もふるえる程の美しさのことを思い出している。「夕景色の鏡」のなかの、「映画の二重写し」のやうに動く映像は、それ自体「この世ならぬ象徴の世界」だったと書かれるが、あの小説冒頭の幻想的場面が、いま現実の火によつて危うくされている肉体と、さらに照応することが可能なのだろうか。「一瞬に駒子との年月が照し出されたやうだった」と続けて書かれている。とすれば、「刺すやうな美しい目」、「悲しいほど美しい声」、「純潔な愛情の木魂が返つて来さうな」余韻によつて、島村をその都度魅惑した土地の娘「葉子」とは、何だったのだろうか。

なぜ火事場から助け出された葉子が「気がちがふ」といわれるのか、には伏線がある。それは駒子が葉子に常々言う口癖として、葉子の口からくやし気に島村にはもらされていた。葉子の一途なやさしさや、無私の愛の行動ぶりを見れば、その不安もわからぬでもない。しかし火をくぐった葉子が発狂するというのは、どこかつながらない一人合点がある。

さらに、決定稿からははぶかれているが、「葉子も彼を打つ鞭を持つてゐた」「火の枕」というモラル的な表現があつたことも、見逃せない。葉子は、もともと、小さな島村が、その鋭い美しさを、初め正視出来ずに、窓

に反射した幻像で盗み見た少女なのであり、彼の行為を罰する資質を生きながらに具えている、まぶしい程の無垢の存在だった。駒子にぐったり抱かれた葉子が、駒子の「犠牲か刑罰か」に見えたとする島村の言い方では、とても及ばぬ程の人格なのだ。つまり、この小説の最終部は、すばらしい作品を決定的に終わらせはしたが、同時に構成の首尾を失わせ、駒子との愛の顛末の哀切さのみを生き残らせる結果となったといつてよいのである。

この物語のモデルについて、著者は、「駒子」が実在し、現実に、幸い結婚をしたことを語るかたわら、「葉子」にあたるモデルは実在しないことを明らかにしている。(「川端康成氏に聞く」三島由紀夫・中村光夫との鼎談。昭和三十七年)そして、実在しないモデルに会って、「葉子といふモデルの眼はいかにも光つてみました」という報告までしている花柳章太郎の逸話を披露している。葉子が、作品「雪国」にとつて、いかに不可欠な人物であるかを物語っているが、どこか禽獣的な一途さ、不可解な冷たさを秘めた妖精が、やはり実在はしないことを知って、われわれはほっとするのである。

(十二) 「舞姫」——家長の問題

三島由紀夫には多くの川端論があるが、「川端康成ベスト・スリー——『山の音』『反橋連作』『禽獣』」(毎日新聞・昭和三十年四月十一日)には、「雪国」に対する明瞭な評価が見られる。彼も「ベスト・スリー」に「雪国」を入れるか入れないかで、「ずいぶん迷つた」。「しかし『雪国』には、なほ、近代主義の残滓がある」としてこれを探らなかつた。その選択基準は、「古典の血脈にふれ、日本文学の伝統に足を踏まえ」ているかどうかでなされ、それに続けて「思へば、敗戦は若い世代のみか、かうした年齢の作家にとつても、自己の変革の機会だつたのである」と書かれている。

川端康成には、没後に発見された、『雪国抄』と題された短縮版の原稿があり、死の年に書かれたことがわかつている。この作品に対する著者のこだわりと、愛着を示しているが、そこでは、葉子という人格が全く消されているのが最も大きな違いである。またそこには、繭倉の火災や天の河の場面もなく、もっぱら駒子との交情の場面ばかりが抜粋されている。三島の川端論の言葉を借りれば、「近代主義」——つまりモダニズム的な要素を全部払拭したあとの『雪国』が、白々と残されていると感じられるのである。

「敗戦によつてそのかなしみが骨身に徹つたのであらう。かへつて魂の自由と安住とは定まつた」と「独影自命」にあるとおり、懸案の「雪国」完成を果たし、かけがえない文学上の同僚、横光利一と、恩人の先輩、菊池寛の死を見送つて以後の昭和二十三年は、川端康成にとつて、大きく転機の年となつた。この年、越し方を回想し、精緻に自分史を記述した『独影自命』を後書きに、十六巻本の全集を出し、六月、志賀直哉のあとを継いで、ペンクラブ会長に就任する。国際的作家として力量を測られることになる作品『千羽鶴』と、大作『山の音』は、ともに翌二十四年に執筆が開始され、『舞姫』の新聞連載は翌二十五年に始まつた。『千羽鶴』は、「茶道」という日本の伝統世界の末端の、隠微に閉ざされた人間関係を、現代の光源氏の愛欲のデカダンスをとおして描き、危機感を漂わせ、『山の音』『舞姫』は、日本の「家」の、敗戦による変質と崩壊への予感を、時代相の動きとともに、明確に伝えている。そしていずれも、このままではどうにもならぬ停滞を突破すべき、動きの予兆を示しながら作品が終わつているところに、共通点が見られる。その鍵を握つているのが、ひとしく作中の若い女性たちである所を見逃してはなるまい。『雪国』の葉子が、繭倉の蚕のように火の犠牲になつて処分されると、対照的な作風の違いを指摘出来よう。

これらの、大きな視点からする把握の態度は、悲しみの極まるころまで運命を共にしたもの（日本）の未来にかかわる、憂慮（ゾルゲ）から生まれたものである、と言うことが出来よう。そしてそれを読んでもらう読者層のなかに、「世界」が意識に入れられていたであろうことが感じられる。自分の作品が、西欧世界に理解されるという観念は、敗戦までの川端康成には、少なくとも殆どなかったことと思われる。この点で、それがそうではないことを強くアピールする文言が、「往復書簡」の、きわめて早い段階に見られることに言及しておかねばならない。すなわち、敗戦後の、三島由紀夫の川端宛ての第一信（昭和二十一年一月十四日）に、是非一度自宅の訪問を許してほしいと述べたあとで、

もしお目にかゝれます折は、アツシユさんといふ日本語の達者な進駐軍士官のことなどお話ししたいと思ひます。この人が川端さんの大の愛読者で、「浅草紅団」は一番面白かった、と言つてゐますが、この人などは教養といひ人柄といひ進駐軍でも出色なのではないかと存じます。

と書かれている。これに関連する記事は、その後の両者の書簡に見当たらないが、占領軍スタッフとのこだわらぬ文化的交流を早くも感じさせる、文学上の若い世代のもたらしたこの嬉しい情報が、敗戦を独特な深い悲しみで迎えたこの中年の作家の胸に、どれ程の新たな勇気を与えたかは測り知れないものがある。

現代日本文学の欧文訳が開始するのは、おおむね昭和三十年代からだだが、『伊豆の踊子』が三十年（抄訳）、『雪国』が三十一年、『千羽鶴』が三十四年に、サイデンステッカー訳で紹介され、川端康成がヨーロッパで知ら

れるきつかけを作る。ドイツ語訳もほぼ同じで、三十一年に日本人訳による『千羽鶴』の紹介があり、三十二年にペンル訳による『雪国』紹介が行なわれた。フランス語訳では、三十五年のアルビン・ミッシェルによる『雪国』が最初であった。これにやや遅れる恰好で、イタリア、フィンランド、オランダ、ユーゴ語訳が続くが、ポーランド、デンマーク、スウェーデン語訳が出るのは昭和四十年代になってからである。特徴的なのは、これらがいずれも、『雪国』か『千羽鶴』に限られていることで、『山の音』の欧文訳が出たのは、実に川端康成のノーベル賞受賞の翌年のスペイン語訳（昭和四十四）が最初で、次いで昭和四十五年のサイデンステッカーの英訳であった。すなわち、川端康成は、ドイツ語訳『古都』並びにこの二大長編によってのみ、世界的評価を受けたのであって、『山の音』は、受賞対象作品にはなり得なかつたのである。

一方、三島由紀夫について言えば、これも昭和三十一年のウエザビーによる『潮騒』英訳が最初だったが、十二年のキーンによる『近代能楽集』英訳、三十三年のウエザビーによる『仮面の告白』英訳、三十四年のアイヴァン・モリスによる『金閣寺』英訳という風に、矢継ぎ早の創作活動と平行するような素早い翻訳紹介が行なわれている。欧州各国語訳が数年遅れで続く様子は川端作品の場合に似ているが、翻訳の数、種類の多さからいえば、川端康成とは比較にならぬ豊富な軌跡を示している。三島由紀夫は、いわば国際的作家向きに生まれついていたと言つてよいであろう。

川端康成は、ペンクラブの会長として、積極的に外国にもものを言うことの必要、日本文学を、もつと世界に紹介しそのなかに位置づける必要を痛感しはじめていた。そのような声がいろいろ外国から聞こえ、具体的な提案がなされていた。「かういふ話は前にもありましたが、ペンクラブで怠けがちでした。しかし応じた方がよいと考へるばかりでなく、実行に移すやうつとめるつもりです」（昭和二十六年八月十日付け）と書いているが、同書

簡には、「あなたの仮面の告白を訳して居るアメリカ人は何といふ人で何をして居るのでせうか」という箇所がある。あとの鳥がすでに遙か前方を飛んでいたことを如実に示す事実である。

昭和二十六年は、朝日新聞に連載していた『舞姫』が完結して本になり、二十四年から書きはじめた『千羽鶴』は一応完結させ、同じく二十四年から書いている『山の音』は、なお様々な雑誌に連載中の状態であった。この作品が一応結ばれて本になるのは二十九年であるが、二十七年二月には、それまでに発表されていた分のみを、完成した「千羽鶴」と併せて、『千羽鶴』というタイトルで本にし、これが二十六年度の芸術院賞を受賞した。こうした何年にもわたる執筆、異なる雑誌への不定期の分割連載、作品とは切り離して「章」単位での鑑賞を期待する態度は、『雪国』をはじめ、川端康成の多くの長編小説が普通にたどった成立形態であった。しかし、通常単行本を基準にして仕事が行なわれる翻訳にとつては、扱いにくい作家であったと考えられる。それが、『山の音』のような大作が、これ程不当に長く、外国人に知られることがなかった理由ともなっている。さらに、川端文学の多くが「未完結性」を備えており、それは、初期の『浅草紅団』や『掌の小説』から『千羽鶴』『山の音』にいたるまで例外ではないのである。この点が、執筆計画を寸秒も違えぬ「銀行マン」タイプの、三島由紀夫の執筆態度、続稿を顧慮する必要のない完結性とは正反対と云ってよい所である。この若い小説家は、常々、執筆開始時にはすでに最後の言葉は出来ている、というよりはむしろ、最後の一句が決まってはじめて筆をとるのだと、自分の制作態度を説明しているのである。

新聞連載のため、テーマとしての「家族」が鮮やかに打ち出されており、完結もしている『舞姫』は、この家族分裂の一方の核に、波子（妻）、品子（長女）というバレリーナを置いている点で、『雪国』との関連を見るこ

とができる。主人公の島村が、西洋の舞踊の批評家として紹介記事などを書く文筆家であること、それも、現実には見たこともない本場の資料にくわしく、一方「日本人の西洋舞踊は見向きもしない」という、インテリのデレタントの典型であることのみが、唯一の素性として紹介されていた。島村にとって、西洋舞踊とは、観念としてのみ意味があり、現実になつては困る喜びなのだった。作中では、「芸者」駒子との隠れた愛が、表だつた愛としては現実化され得ないものとして、彼のこの趣味的「職業」のあり方との相似が述べられていた。

その現実になつては困る「現実」が、「舞姫」の八木家の大きなねじれの根源にある。八木家の主人元男は、戦時中「吉野朝の文学」という本を書き、時代に迎合した国文学者で、そのため敗戦によつて、「心の美がほろんだ」、古い日本の亡霊になつたと言ふほどのショックを受けている人物。大きく時代にとり残された形だが、今は、仏像・仏画の女性的美を集めて、「美女仏」という風変わりな文学論の仕事に没頭して、負い目を返そうとしている。だが、「異様なリアリティー」(三島由紀夫「舞姫」解説)で書き込まれているのは、家庭人としての八木である。

もとは貧乏学生で、波子の家庭教師から彼女と結婚。すべてを豊かな妻の家の財力にすがつてきた。それが習性になつたかと思われる程、子供も二人出来、大学の講義からの多少の収入もあるはずの今日になつても、あらゆる出費を自分からは出さず、妻の懐をあてにするのは、二十数年前と少しも変わりが無い。しかも自分名義の貯金はひそかに行い、さらに、妻の財産だった家の名義も、黙つて自分の名義に書き替へているのがばれる、といった卑劣漢である。親に対する批判の目で、そのような両親の力関係が見抜かれている現在も、強引にこれまでの行き方を押しとおそうとする、父のずるさの前で、品子と高男姉弟は戸惑いつつ、自分独自の行動を決めざるを得なくなる。母譲りのバレエの道を歩む品子は、母を守ろうとし、強い父に憧れる高男は、父の計画にし

たがって、戦争からは遠いハワイの大学に逃げるつもりである。父母が別れる勢いを、二人とも致し方ないとは思っていても、それを決定する内的動機を見つけられない。四人を固く結びあわせていた戦争の記憶はまだ生々しかった。ただし、八木をそれほど悲観させているのは、折から中国共産義勇軍の参戦で泥沼化が始まった、「朝鮮戦争」の行方なのである。

八木波子は、先の戦争のために、自分たちのバレエのキャリアが中断されたことを悔やんでいる。もしあれがなかったら、品子も、今頃はイギリスかフランスのバレエ学校生徒だったかも知れない。波子の相手をしていた香山という有名な男性舞踊手も、戦後消息を断ち、今、全国的にバレエが勢いよく復興しつつある戦後の波に乗り切れない。しかしともかく、北鎌倉の住居の裏山にけいこ場を建て、日本橋にもけいこ場を持ち、かなりの数の生徒たちを指導し、娘品子が、「大泉バレエ団」の研究生として若手の道を歩んでいる現状は、この家の重苦しい空気を、説明するものではない。戦前には、夫の協力で「仏の手」というレパートリーも持っており、その再演は、むしろ待望されているらしいのだ。家庭崩壊は、挙げてひとりの家長のねじれた怨恨感情に発していることが次第に判明する。

八木は、妻と娘の夢であるバレエの価値を、今は少しも認めてはいない。それは、波子のいない所で、「四十女が踊つたところで、君、次の戦争までの、短い間だ」とか、「うちの女どもとは、残念ながら知恵の深さがちがふやうだね」という身内を馬鹿にした言葉を、平気で吐き出す態度からもわかるが、娘の品子には、二人の舞踊への情熱を「センチメンタリズム」にすぎぬと冷水を浴びせる。すべての赤字を、自分の財産の売り食いではないでいる波子の苦労も察せず、あらゆる出費をけちり、金のかかることは止めさせようとする。そのことで波

子の気苦労は絶えないのだ。この男の家長的鈍感さは、敗戦によって勢いよく「解放された」バレーと、自分が、どの地点で噛みあいようもなく離れてしまったのかについて反省さえしようにとしないのである。

ニジンスキーとか崔承喜その他、世界的な舞踊家のエピソードをも豊富に入れながら語られる「舞姫」は、その実、ダンスそのものの持つ動きやリズムを欠いて、少しも軽快さを感じさせない小説である。それは、この作品そのものの上に君臨する家長によって、あらゆる動きが押さえ込まれている構造から来る。波子は、自分がこれまで抵抗出来なかつたものの正体について、少しづつそれが見えるようにはなるが、結局は、「はじめから、わからなかつた」人物、「わからなくても、いつしよにみられた時が、終つた」という自覚にとどまる。しかしようやく、このとき波子は、家長という奇怪なモンスターから解放される契機を得るのだ。

バレーという、近代身体芸術の活発さとは裏腹な、ほとんど優柔不断ともいえる波子の夫に対する態度は、かつて結婚時、八木のライバルでもあり、現在は成功したカメラ企業家である竹原を、相談役、恋人役として呼び出し、この関係がひとつの筋を形成している。しかしその竹原もいうとおり、八木は、外見からして「温厚な美男子」で「立派に見える」。家庭でも特に暴力をふるうわけではなく、むしろ、妻子に好きなことを許す物わかりのいい夫と見える。その専制的な目に見えぬ力が、どのように周りに及び、生命を萎えさせていくのかは、家族、とくに妻にしかわからない。この隠微な恐るべき力のあり方を、川端康成は、あるがままに、一步も引かず観察することに成功している。

この小説の終わりに近い一章に、「仏界と魔界」というタイトルがある。見慣れぬ、一休筆の「仏界入り易く、魔界入り難し」の一行の書が八木の書齋に掛かっていた。これは或いは父の心と何か関わりがある言葉かも知れ

ぬ、それにしても、逆説めいていて難解だ。そこで品子は、父のいるときに部屋に入り、その意味を問うてみたのである。この家の崩壊を食い止めたという、一生懸命な心のあらわれととれる行動だ。だが、八木の解釈は、辻褃のあわぬこじつけに類する浅薄なもので、答えにはならなかった。ここに、人生の深い指針があるのかと感じた、品子の受け取り方ははぐらかされ、感傷性の有無という、至って主観的な区分が教訓めかして話されたのだった。品子が決定的に父とたもとを分かったのは、このときである。品子は、「強い意志で、生きる世界」と自分で解釈した彼女の「魔界」に向かって、自分の運命に向かって、動いて行こうとする。目標は、先ず、伊豆に引退していると聞く、伝説的な男性舞踊手の門をたたこうというのである。誰に言われたのでもない、この道が彼女の「魔界」に通じるのであろう。

(十二) 「山の音」——尾形家の再生

『舞姫』の八木家が、「愛情によつてではなく嫌悪によつて結ばれた見事な家庭の典型」(三島由紀夫)であり、崩壊・分裂を内包し、しかも夫の、家長としてのあり方そのものから亀裂は発していたのに対し、尾形信吾は、崩壊の兆しに敏感で、これを可能な限り大事にいたらせまい、とする努力にまめな家長である。作中、非常に早い段階で、ふと、満月に近い夏の夜の静寂のなかで、地鳴りのような「山の音」を聞き恐怖を感じる。それはたった一人の経験で、他に誰も聞いたものはなかった。鎌倉の谷(やと)の奥の、自分の家の裏山からだった。風の音でも、近くの海の音でも、耳鳴りでもなかった。

信吾自身、死期の告知かと思つた程度で、これを主人公の「死」の予感ととつて間違ひはないのだが、山の地響きは通常「家」の崩壊につながる。その「死」は、信吾個人を襲うものであつて同時に、家を襲うものである。

信吾は、自分の死のなかに、尾形家の死を無意識に感じていたに違いない。

尾形家は、当面ふたつの問題を抱えた家族である。一つは、戦場がえりの長男修一の素行に関する。彼の心には、復員後の兵士によく見られた、まだ満たされぬ不安定な虚無感が残っており、美しく清楚な妻、菊子を、素直に受け入れられない。他に女をつくり、子供までつくらせるが、その相手の女性も戦争未亡人なのだ。もう一つは、これも長女、房子の家の崩壊で、二人の幼児を連れて何となく戻って来たり、またよその親戚へ厄介に言ったたりした挙げ句、大晦日の夜、とうとう夫と別れる決心をして、生まれた家に戻って来る。半年の後、離婚届けが夫の相原から郵送されて来たが、その数日後に伊豆の温泉で心中未遂を起こし、女の方だけが死んだという新聞報道が出る。相原が、酒癖が悪く、麻薬の売買に手を出していたなどの外は、素性についてほとんど説明されることなく、娘の夫に対する尾形の判断がややあいまいだが、結婚自体は最低の結果に終わった。

この件では、尾形の名前こそ出なかったが、ここまでに至る経過に対し、尾形家は、確かにほとんど何も手を打つことがなかった。しかし、事件が起こったときにも、房子の判を押したこちらの離婚届けは、信吾のかばんに入ったまま、家と会社とを行ったり来たりしていて、最後まで事態の好転を願っていた。いやそれどころか、新聞を引き裂く房子に対して、「房子、お前、相原を迎へに行つてやる気はないか」と言ってみて、房子にうらまれても、「房子が相原を迎へに行つて、離れてゐた二人が再び結ばれ、二人のいつさいが新しく出直すやうなことも、人間にはあり得るだらうと、じつと思ひつづけた」とあり、結婚や男女のことについて心が寛く、人を責めない人柄が浮かびあがる。実は、相原の体の不自由な母親には、自分一人の判断で金銭的な援助をし、会社の若い者を使って、かげながら様子を見守っていたことも、明らかになる。

そうは言っても、そんな次第で、形の上で三世代同居とはなっても、家長という言葉を使うなら、信吾は、明

らかに失敗した家長なのだ。その元日、修一は、「なにか毒を吐くやうに」、父の一生について考えている、と言する。

「漠然とですが、強ひて結論をもとめると、成功だったか、失敗だったかといふやうなことになるんせうか。」

それに対して父は、「わかるものか、そんなことが……」と突き返すが、

「親の生涯の成功か失敗かは、子供の結婚の成功か失敗かにもよるらしいんで、これには弱つたね。」

と答え、息子はさらに「お父さんの実感ですか。」と追い打ちをかける。

さらに、小説の出だしから、最近の信吾の記憶力に、相当のおとろえが見えることが強調されており、幸い自分でもその自覚がある。迫られている問題の切実さにくらべ、小説のリズムがのどかである理由も、老齡者のゆつくりした生活のリズムに負うところが大きい。自分の主たる仕事である、東京の社長業こそ、大過なくこなしてはいるが、日常のことでは、周りの人から助けられることが多くなっている。たとえば、先に挙げた、自分だけが聞いたとして緊張した「山の音」も、同じような現象を、妻の保子が、彼女の姉の死の前すでに経験して話題になったことを、すっかり忘れていたのだった。嫁の菊子がすぐ思い出し、「ばあさんはぐうぐう寝てるん

だ」という「愚妻扱い」に対して、やんわりとそれを訂正する。信吾は、われながら「まったく救ひがたい」と思う。彼は時折、自分の脳を「大学病院へでも預け」修繕してもらい、三日でも一週間でもぐっすり寝ていた、と空想することがある。

そんな彼が、息子の不始末を食い止めようと行動に出るが、彼を悩ませるのは、その息子を含む若い世代の考え方だった。修一は、父の会社に勤め、往復も父と一緒にだったのが、最近は一緒に帰らぬことが多い。結婚して二年にしかならぬのに、東京に女が出来たらしい。だが息子は、特に悩む風でもなく、重苦しくもないので、見当がつかない。そして、それと覚しき頃から、菊子との夫婦関係も急に密になってきたことを、信吾は、同じ家なので感じとっている。彼は、社長室つきの若い谷崎英子を、息子が彼女とよく行くダンスホールに連れ出すことから始めた。何回かにわけて英子から聞き出した情報から、相手の女性が、女同士の二人づれで踊りに来ている、菊子よりは年上の美人で、しゃがれ声が「エロチックな」ひと、一緒にの女性も「とても感じのいい」ひとで、二人は同棲していることを知る。次いで、ある日、しぶる英子に、彼らが住む本郷の家まで案内させる。その家で、修一は泥酔し、「乱暴」し、同居の女性に無理に歌をうたわせ、相手の女性が泣くといった狂態が演じられるのだという。しかし信吾は、英子を密告者のようにしてしまい、とうとう怒らせてしまった。

英子は居づらくなつて会社を止めるが、その後も、自分の考えで、信吾のために協力し、二か月後に、池田という、修一の女と同居している戦争未亡人を無理に引つ張つて現われる。その口から、戦争で夫を奪われた女たちの、満たされぬ思いを聞かされ、また、修一・菊子を、親と別居させてはどうかと勧められる。洋裁の方で相当の腕をもっている絹子は、修一には経済的な面倒をかけてはいない筈だ、修一と別れても、墮落することはあ

るまい、といわれ、反発と同時に大いに同感もした。話していて、英子までが今は、二人と同じ洋裁の店に勤めていることがわかる。

そのうちに、嫁の菊子が妊娠し、親たちには相談もせず、自分で墮胎の処置をしよう事態が起こる。それを聞き出したのは、夫の修一からで、驚いた信吾が激しく難詰すると、菊子がそうすると聞いて聞かず、修一が今のままでは、子供は産まぬという理由だ、菊子の潔癖からだ、と平然として答えるのだった。孫の誕生を心待ちしている保子などは、気がついていなくても、仰天してしまう。「今の人はなんて恐ろしい」。これも又、信吾の無力をものがたる歴然たる失敗であるが、信吾は、検見川の弥生式古代遺跡の丸木船のなかから発見された三粒の蓮の実が、二千年の時空を超えて発芽し、今年見事な花を咲かせたいニュースの新聞をもって、菊子の部屋を見舞うほかなかった。菊子は、目に涙を浮かべるが、翌日、病院に診察に行つて、里に立ち寄り、二、三日寝て帰ることになり、その時に保子は、はじめて事情を知つたのだった。

菊子が中絶した子供には、信吾の特別の思い入れがある。房子の子供たちは、幼いながら、母親に似たのか、余り美しくなく、性格もひねたところがある。自分の孫としては、遠い感じだ。だが「この失はれた孫こそは、保子の姉の生れがはりではなかつたらうか、そしてこの世には生を与へられぬ美女ではなかつたらうか」と、妄想をたくましくする。ほっそりと色白で、氣立てもやさしい嫁の菊子は、義父、信吾のお氣にいりで、肉親が思いどおりにならない、鬱陶しい家庭の「窓」のような存在だというが、実は、信吾が少年の頃あこがれていた、保子の姉のおもかげに連なり、自分の満たされなかつた思いを明かすませる、それ以上の意味を持つようになつていた。この死んだ「姉」への憧れは、この作品の構造の深層を走つており、信吾の生きる力の源となつていくのだ。妻、保子自身が自分のこの美人の姉を崇拜しており、やはり美男子で堂々としていたその夫とともに、尾

形家の、いわばインフエリオリティー・コンプレックスの基準点ともなっているのである。しかし、もちろん誰よりも、この家長を支配している厄介な劣等意識、裏返ししの憧憬こそが、よくも悪くも、尾形の家庭の現状のすべてに隠微に反映しているといつてよい。登場人物の多くが、容貌の美しさ、醜さを先ず問われるのは、この小説が、一般の物語の言葉よりは、心理的に一層深いところから発せられていることを、如実に物語っている。

美しく生まれついた長男は、美しい嫁をもらうが、父の満足に反抗して、他で自分の力を誇示し、自分の子の中絶には怒りを示さない。醜く生まれついた長女は、心満たぬ結婚をして、相手も不幸にし、醜い孫を連れて舞い戻る。美しいものも、醜いものも、この家では、等しく不幸なのである。この小説の読者にとって救われるのは、醜いとされるものたちが、はつきりとそれに抗弁し、美しいとされるものが、そのような判断には従わぬ行動をとって、自己主張することである。菊子の墮胎もまたその一つととることが出来る。

菊子は、この義父が好きで、したっている。信吾が、修一の素行を改めさせる手として、親の家からの別居を考え、菊子にも何回か持ち出してみるが、涙をためて呑まれた。一緒に住みたい、別れて住むのは恐ろしいのだという。死んだ友人の遺品として譲られた、能の慈童の面を、菊子にかぶせてみたいという信吾の遊び心に素直にしたがつて、面をつけて顔を動かして見せていた菊子が、こらえていた悲しみに耐えず、激しく泣きだす場面では、たとえ修一と「別れても、お父さまのところにて、お茶でもしてゆきたい」とはつきり希望を述べる。時間的にはそれから間もなく、菊子は取り返しのかかぬことをするのだが、彼女としても、修一としても、ぎりぎりの行動だった筈だ。

「あなたは、菊子をただ可愛がるばかりで、肝腎のことを解決しておやりにならないんだから。房子のこ

とだつて、さうぢやありませんか。」

という保子の非難は、まさにそのとおりだが、信吾が解決できる立場でないことも確かなのだ。その中絶の話を持って、英子は再び会社に信吾を訪ねて来る。

菊子の中絶を他人から聞く不愉快に輪をかけて、その報告は、信吾を突き落とすものだった。「その中絶の費用を、修一さんは絹子さんのところから、お持ちになったのですわ」というのが内容で、女として許せない、菊子が可哀相だ、というのである。そして「別れさせてあげて下さい」と言い、信吾は思わず「うん」と答えるが、菊子のことか、絹子のことかわからず、自分自身、修一と同じ泥沼にうごめいているのを初めて感じた。

英子の三度目の来訪は、いよいよこの件の最終段階ともいうべきことの報告のためであり、絹子の妊娠、そして彼女が「産む」決心であること、絹子に会うなら早いほうがいい、もう四か月だからという話であった。信吾は、「また、人殺しぢやないか。老人の手をよごさなくつたつて」とひとりごとを言いながら、本郷へ向かう。英子の言うとおりで、子供を産むという絹子の決心は堅いようで、「戦争未亡人が私生児を産む決心をした」のだ、「子供は私のなかにも、私のもの」だ、修一とは別れた、修一の子ではないとまで言い張るのだった。

戦死した人の子がいつぱいゐるて、母親を苦しめてゐますわ。戦争で南方へいらして、混血児でも残して来た、と思ひになればいいわ。男の人が遠くに忘れた子供を、女が育てます。

こんなことはこの時代に特別なケースではない、といわなければ、涙を流しながらきつぱりと引かぬ絹子を、信吾は、美しいと思つた。信吾は、小切手を渡して立ち去つた。

それでも信吾は、機会をつかまえて、修一に、絹子の子が自分の子かどうか知りたくないのか問いつめるのだが、息子は、そういう問い自体が理解できないようだった。英子からきた最後の手紙は、絹子が沼津に引込み、小さい洋服店を開く計画を実行に移したことを、報じていた。そこで子供を産んで育てるのだろうか、と信吾は思つた。

以上が、尾形家の危機の核にある事件であるが、鎌倉の自然の四季ごとの現象、動植物との関わり、物故者の増えてゆく旧友たちとのたまゆらの交際や葬儀、社用の宴会、それに、老人がひとり見る不可解なあるいは滑稽な夢、性的な夢の数々を、精妙に縫い合わせたキルトのような、小さく変化しながら流れる時間の中では、亀裂は目立たず、暴力的に現われることもない。しかし作者が、この作品で最も言いたかつたことは、老人の時代が終わり、全く異質の時代がすでに始まっていることの告知であり、「尾形家」の再生が始まろうとする静かな転換の姿である。そのために作者が用意した、ふたつの感銘的な場面を挙げておきたい。

一つは、終わり近く、通勤の列車のなかで信吾と修一の間で交わされる「自由」についての論争である。手短かに言えば、修一は、父のような運命論を全く信じない。奇跡的に人が人に似ているなどということに、さ程感動する理由はない。もつと根本的なことは、誰でもが、あらゆる点で自由だということだ、と言う。「菊子だつて、自由ですよ、ほんたうに自由なんですよ。兵隊でも囚人でもありやしない。」「自分の女房が自由とはなんだ……」議論は瞬間的に激しいが、見かけよりはもつと大きな深淵が、親子の間を隔てているのだ。戦後を代表す

る「自由」という思想は、こんな形でも展開されるのだということ、われわれは知る。そこに尾形家の苦悩と、転換のための真率さがある。信吾は、言葉を失い、たじろぎ、きよとんとし、ついには喉がつかまってしまふ。

もう一つは、信吾が、信州の故郷のみじを、久しぶりにみなで見にゆかないかと提案する、小説最後の部分である。房子と修一は、留守番をするという。だが、その少し前に、房子は、自分に小さな店をやらせてほしい、化粧品店でも、文房具屋でも、屋台かスタンドの飲み屋でもいい、やってみたい、と言ひ、菊子が、そうならば自分にも手伝いをさせてほしいと応じ、この思いがけぬ成り行きに、夕飯を囲む一同がしいんとしてしまふ。房子は、信州ゆきの前に、父の答えがほしいと念を押す。そして信吾は、お腹に子供を持って、沼津に小さい洋裁店を開いたという、絹子を思い出しながら、「一つ結論を出しておかう」と言うのである。

房子が、夕飯のおかずの鮎の話から、自分が、川の淵にひそむ「とまり鮎」にたとえられて、思わず叫んだ言葉を使って彼女の気持ちを言いなおせば、こうなる。

「長くひそんでないわ。いやよ。海に下るわよ」

そして食事が終わり、修一がまっさきに立ち、信吾がうなじの凝りをもみながら灯をつけて、菊子に声をかけるのだが、その声は、食器洗いに入った菊子の耳には聞こえなかつたらしい、という最後の一行の余韻が、適切にしめくくる。この夕食は、尾形家の人々の再生の方向を決定づける、実に重要なミーティングであつたといえ

るのだ。

(未完)